

【小説部門・優秀賞】

evil

徳島県立城東高等学校 第3学年 大久保 杏咲

「悪の対義語って何だと思う？」

夕方の病室は、ルビーの果肉を握りつぶしたみたいな赤色だった。ベッドから起き上がって話す少女の横顔もまた、目が焼けるような蜜柑色をしていた。少女の肌は雪景色のように儂く、病室の壁との境界線が曖昧になっている。

「善じゃないの？」

少年は問いかける。少女の、ガラスよりも透明な瞳が少年を捉えていた。答えを聞いた少女は少年から視線を外して、シーツに落ちた自分の影を見つめた。その目蓋にかかる光は、微かに闇を含んでいる。その暗さを吸った長い睫毛は艶やかに光り、間もなく面会時間が終わることを告げていた。

「一般論はそうだね」

昔から、少女はほとんどの時間を病室で過ごしてきた。本を読むくらいしかすることがなく、少女はとても物知りだった。「一般論」や「対義語」のように、小学生にしては難しい言葉をよく使う。ふとした仕草や表情から滲み出る知性が、少女の魅力を引き出していた。

「そうじゃないの？」

少年は不安そうだった。「あく」という言葉に人一倍敏感な少年は、自分が今よりもっと「善」から遠い存在にされそうな気がしていた。

「この話をしていると遅くなっちゃうから、また今度ね」

飴細工みたいな声だった。飴でできた兎が少女の喉で跳ねる。年相応に明るい声を出そうとすれば、時々変に裏返った。

「あ、……うん」

少年は、遠くの空から順に景色が影に呑み込まれていくのを遠い目で見ていた。どうか闇が少女を食べてしまいませんかのように、と願う。

「またね」

少年は手を振ると、すぐさま少女に背を向けた。手を振り返してくれる少女の腕に繋がれた管を、視界に入れないように。少女が動く気配を感じながら、少年は病室を後にした。

途端に病室が静寂に包まれた。少女は電池の切れたロボットになって、窓の外をぼーっと眺めていた。どこもかしこも、燃えさかるように赤い。少し時間が経ち、病院から出ていく少年の姿が見えると少女の瞳が煌めいた。少年の後ろ姿を目で追いながら、次に会える日のことを思い浮かべる。学校にも通えていない少女にとって、少年は唯一の友達だった。少年は道路を歩き、病院から——少女から離れていく。高いビル群と人の波に揉まれ

て、ジオラマのような街へ消えていった。

少年を見届けた後、力をなくしてベッドに横になった少女は「evil」と呟いた。覚えてたの「V」の発音が唇を震わせる。その音が全て紅色に溶けた頃、少女は目を閉じた。

夕闇が世界を覆っていく。少女のいる病室にも、闇が忍び寄ろうとしていた。

※

「うわあああん」

少年の耳を劈いたのは、シンバルのような泣き声だった。少年の前には、尻もちをついて倒れ、泣き叫ぶ男の子がいる。周りに箒が散乱し、集めた埃が巻き上がった。クラスメイトたちが「先生！」と必死に叫んでいる。教室中が軽いパニックに包まれるなか、少年はその中央で傍観者のように佇んでいた。右手の握り拳がズキズキと痛み、身体中の熱が全部集まっているみたいだった。

「また青空(あく)くんなの」

教室にとび込んできた担任は、鬼のように顔を引きつらせていた。甲高い声が降り注いでも、少年は床の一点を虚無に見つめたままだった。

「青空くんってやっぱり悪い子だ」

「青空なんて名前だから悪なんだ」

突然、周りで騒ぎ立てるクラスメイトたちの声が少年の耳に波となって押し寄せた。声がぐわんぐわんと少年の頭の中で響く。

「僕は、僕は悪なんかじゃないっ」

その気持ち悪さに自分の置かれている状況を思い出した少年は、叫んだことにも気づかずに教室を飛び出した。

「青空くん！ どこいくの」

先生の声は少年の足音に掻き消された。少年は走った。初めて廊下を走った。初めて放課前に学校外に出た。一つ一つのルールを破るたび、自分が本当に悪なのではないかという不安に駆られた。家に帰れば、学校から連絡が入った親に大目玉をくらうことを分かっていた。「これで何度目だ」と言われることも、それでも気づけば友達に怪我をさせてしまうことも。それでも、少年は足を止めなかった。心の中でお母さんと叫ぶのに、返事は一向に返ってこない。寂しさで飽和する空っぽな少年の胸。そこから湧き上がる何かに突き動かされ、少年は足を動かしていた。

走って、走って、辿り着いたのは少女のいる病院だった。無我夢中でここへやって来た少年だったが、建物内へ入るのに躊躇した。

「今日は、会えるかな」

今までは一度もなかったことだったが、少年はここ数回、面会を断られていた。少女の容態が悪化したのではないかと、少年の心には嵐が吹き荒れていた。それでも、少女にどうしても会いたくて、一步を踏み出した。病院へ足繁く通う少年の足取りは確かに小児病棟へ向かう。近くにいたナースに少女のいる病室番号を伝え、今日はどうやら会える

らしい。知らず知らずのうちに身体が強張っていた少年は、ほっと肩を撫で下ろした。

病室の扉の前に立ち、一つ深呼吸を吐いた。トントントン、と三回ノックしてから扉を開ける。

「久しぶり」

溶けた飴がとろりと少年の胸に入っていく。元気な扉の音に反応して身体を起こした少女が、明るく手を振った。眩しい明るさとは対照的に、少女の表情は少しやつれている。そんな姿を見た途端、少年の瞳から堪えていた涙が溢れ出した。

「今日は早いね。どうしたの？」

少女は少年の痛みを請け負ってあげたかった。普段通り、優しく手を差し伸べた。

「僕は悪なんだ。どうしようもない悪い子なんだ。こんな名前だからっ」

少年はその手を掴もうとはしなかった。自分が触れれば、少女に悪を感染させて死なせてしまいそうだったから。

「違うでしょ」

今、少女の喉で練られたのは龍だった。

「だって最初にここに来たとき、青空くん言ったじゃない」

※

微睡眠の中で扉の音が聞こえて、少女は現へと舞い戻った。日光はまだ眩く、少女の母が訪れるような時間帯ではない。誰だろう、と少女は思った。

重い身体を起こすと、入り口に立っていたのは少女と同年くらいの少年だった。

「こんにちは」

見知らぬ来訪者に心が跳ねた少女は、気づけば声をかけていた。

「こ、こんにちは」

少年はどぎまぎしていた。少女に目線を合わせようとして、すぐに逸らす。肌を小麦色に変え、はしゃぎ回っているクラスメイトの女子たちとは全く違うタイプの少女。線香花火のようで、僅かな衝撃だけで消えてしまいそうだった。

「どうしてここへ？」

なぜこの病院に？ なぜこの病室に？ 「もし、私と同じなら」という淡い願いを、少女は抱いた。退屈な入院生活の色づくことを、少女はいつも夢見ていた。

「あの、お母さんが入院してて、病院の中歩いてたら、なんとなくここに」

「そっか」

膨らませていた風船から、指を離してしまったみたいに。少女の口から出たのは、小さな小さな声だった。

「ごめんなさい」

「ううん、ねえ、名前なんて言うの？」

それでも、少女は久しぶりに家族以外と話すことに胸を高鳴らせていた。少年は名前を聞かれ、少女の周りを彷徨っていた視線を地面に落とした。

「あく」

雑草を踏みつけるように、乱雑に言い放った。名前を言うたび、誰かに笑われ続けてきた。きっと今回もそうだろうと、少年は諦めていたのだ。

「かっこよくて素敵な名前だね。漢字は？」

少年はがばりと顔を上げた。「素敵」と言われたのはこれが初めてだった。日光に照らされた少女の笑顔が宝石のごとく輝いて、少年の心を驚掴みにした。

「青空(あおぞら)って書いて青空(あく)って言うんだ。お母さんがつけてくれてね、大好きなんだ」

少年は自分の名前が大好きだった。涙が零れないよう顔を上げると、そこにはいつも空がある。どこまでも続く青空を見上げるたび、少年は勇気と元気をもらっていた。だから、少年はどんなに馬鹿にされようと心の底から自分の名前を憎むことはできなかった。

※

「お母さんのつけてくれた名前、大好きだって。あの時の笑顔、晴れ渡る青空みたいですよ。綺麗だったよ。私、覚えてるもん」

「どれだけ好きでも、僕が悪い子なことにならないじゃないか」

少年はその表情を涙と鼻水でぐちゃぐちゃにしていた。それでも、泣き声だけは上げるまいと歯を食いしばった。時折漏れる嗚咽が弱々しく病室に響いていた。

「悪の対義語の話、覚えてる？」

少年は上手く声を上げられない代わりに、首を縦に振った。その様子を見た少女が唇を開いた瞬間、少年の胸がずきりと痛んだ。どうしても、自分と悪という言葉が地中で絡まり合って離れないイメージを拭えず、常に正しさに溢れた少女の言葉を聞きたくなかった。走っている途中に振り払ったはずのクラスメイトの声が頭の中を巡り始め、心臓と右手が痛みを訴えていた。

「悪って、英語で『evil』っていうの」

少女はそう言いながら、側に置いてあるホワイトボードに四文字を綴った。小学校で英語教育が始まったとはいえ、少年はまだ「evil」なんて難しい単語は見たことも聞いたこともない。続きを知るのが怖い反面、少女の口から発せられた異国の言葉が「あく」という響きよりも魅力的で、少女が何を言うのか知りたくて仕方なかった。

「これって逆から書くとね」

エル、アイ、ブイ、イー、と一文字ずつ声に出しながら、少女は整った字でアルファベットを書いていく。そこに現れた単語を見て、少年は息を飲んだ。

「ほら、『live』になるでしょ」

まるで、手品を見せられている気分だった。未知の言葉が、聞き馴染みのある羅列に変わる。

「だから、『evil』の対義語は『live』。悪の対義語は善だから、生きることが善なの。もうすぐ死ぬ私なんかよりよっぽど、青空くんのほうが善なんだよ」

空っぽな胸が少女の優しさに飽和した瞬間、きゅうっと締めつけられた。誰かに悪と指を向けられた時よりも、どうしてだか胸が苦しい。

「生きるって素晴らしいことなんだよ」

その理由を探るうち、少年は気づいてしまった。少女の瞳が、最期に話した母の瞳と同じだということに。いつもより憂いを帯びているのに、中心に宿った意思は誰よりも力強い。線香花火がぼとり、あっけなく落ちていく光景を思い出した少年は、慌ててそのイメージを掻き消そうとした。けれど、全てを達観して微笑む少女の儂さは消えてくれなかった。

「青空くんは、退屈だった私の生活を一変させたんだよ」

少年が涙のせいではなく言葉を失ったことに気づいて、訪れかけた沈黙を埋めようと少女が語り出す。

「初めてだったの。昔からずっとここにいたから、学校にも全然行けなくて、友達ができしたのは青空くんが初めてで」

顔を歪めて笑う少女の目の端で、暮れ始めた太陽の欠片がきらりと瞬いた。少年にとってこの病室は異次元の空間で、季節も時間も忘れ去ってしまえる場所だった。少女が「また今度」と言うまで、少年は時間という概念をすっかり忘れてしまえたのだった。けれど、今日は違う。暑さの残る九月。夏は終わっていない気がするのに、太陽が夕陽に変わる時間が早まっていることを、少年は思い出した。それと同時に、少女とのお別れまであまり時間がないということも。

「いつも会いに来てくれてありがとう。青空くんと一緒に学校に通いたくて、もっと勉強頑張れたんだよ。学校の話聞かせてくれたり、一緒に遊んでくれたり、本当に楽しかった」

少女は、自分の頬を熱い何かが伝っていることに気づいた。自分の涙を見たのは、数年ぶりのことだった。長い長い入院生活は、少女から少しずつ感情を奪っていた。しかし、それを取り戻したのもまた、少年と過ごした時間によってだった。

「だから、青空くんは悪なんかじゃないよ。私を救ってくれた正義のヒーローだよ」

「そんな、話を聞いてもらって、救ってもらったのは僕のほうだ」

救えてなんかないじゃないか、と少年は自分の無力さにイライラした。

——だって、もうすぐお母さんと同じように僕の前からいなくなっちゃうんでしょ？

「ううん。青空くんのお母さんが亡くなった時も、青空くんはとっても強くてかっこよかった。本当のヒーローみたいに」

——だから、私がいなくなっても大丈夫だよ。

少年は少女が本当に言いたいことに気づかない振りをして、首を横に振った。少女もまた、少年と同じように首を横に振る。その表情は燃えるように赤かった。

「だから、ありがとう」

燃えているのは、少女ではなく世界だった。

「こっちこそありがとう」

誰そ彼などと思う者は誰もいない。今日は少女の輪郭もはっきりと見てとれた。夏の終わりを、少年はようやく受け入れる。

「そろそろ、時間だから帰ったほうがいいよ」

「うん」

少女は既に泣き止んでいた。少年もこれ以上は泣かないよう、涙を堪えている。幾度となく交わした別れの挨拶。しかし、少女は「また今度」の約束を取り付けようとはしなかった。少年も「またね」と言おうとはしなかった。

「バイバイ」

「バイバイ」

少年が病室の扉を完全に閉めるまで、少女はずっと手を振っていた。西日に照らされた病室が燃え尽きるのを待っている。もうすぐ訪れる闇を、ただ静かに待っていた。

※

それから程なくして、少女は亡くなった。次に少年が病室を訪れたとき、そこに少女の姿はなかった。真っ白な病室に、寂しそうなベッドが一つ。もうこの部屋で飴細工のような少女の声が響くことはない。少年の胸から湧き上がった涙が、次から次へと流れ出した。

「あなたが青空くん？」

ふいに、少年は問いかけられた。後ろを振り返ると、そこには少女と同じように白い肌を持った大人の女性が立っていた。夢中になって泣いていたせいで、扉が開く音に気づかなかったのだろう。少年は嗚咽で声を出せない代わりに、こくと頷いた。

「娘が『青空くん』って子に渡して欲しいって。頼まれたの」

確かにそれは少女の母親だった。佇まいも表情も、少女にそっくりだった。少女から儂さを引けばきつとこういう風貌になるだろう。少女が線香花火なら、母親は大輪の花火だった。少年は泣き顔のまま、渡された紙を受け取った。

「今まで本当にありがとう。善く生きてね」

名前も宛名もなく、その二文だけが記されていた。便箋でもない、ただ二つ折りにしただけの紙切れ。けれど、その丁寧な折り目や整った文字から、少女の面影を確かに感じていた。

「あの子、いつも楽しそうに青空くんの話を聞かせてくれたわ。毎日楽しそうだった。娘と仲良くしてくれてありがとうね」

少年は涙を拭いて、少女の母に向き直った。貰った手紙を濡らしてしまうことのないように。そして、せっかく「強くてかっこいい」と言ってくれた少女に応えたくて。

「かっこよくて素敵な名前ね。青空くんって」

けれど、少女の母親がしみじみと放った言葉に、少年は柵(しがらみ)を捨て去った。ぶわぁっと、少女とこの病室で過ごした日々が頭の中に蘇っていく。嫌われ者になった少年と、少女だけが仲良くしてくれたこと。少年がいつ訪れても、少女は嫌な顔ひとつしなかった

こと。少年が質問すると、少女は何でも教えてくれたこと。少年が来るたびに、少女が「また今度ね」と言ってくれたこと。

涙は川のように流れ続けていた。少年は身体中の水分が消えるまで、思い出の詰まった病室で泣き続けようと思った。

※

世界が夕陽の紅に染まっていた。夕焼けに触れるたび、彼は貰った手紙と少女と過ごした日々を思い出す。完全に記憶の中の存在となってしまった少女が、夢や幻の類でないことを再確認する、一日一度の時間帯。黄昏時に学校の屋上へ向かうたび、彼はどうしようもなく胸が締め付けられて、何かを失うような焦燥感に駆られていた。

「しかし今日はよくリンクしてたな」

彼は屋上へ続く階段を登りながら、今日の出来事を思い出していた。現代社会の授業中、夢へと誘われかけていた時に「善く生きる」という言葉に反応して飛び起きたこと。英語の授業で行われた単語テストで、「悪」が出題されたこと。

今日は少女の存在をいつも以上に感じすぎていた。彼にとって、それはきっと必然だったのだろう。

屋上に出るドアノブに手をかけた彼。いつものように勢いよくドアを開けると、燃え盛る世界の手前に一人の女子高校生がいた。落下防止用のフェンスを登ろうとしていたその人物と、ドアを開けた彼の目が合う。

刹那、彼は気付けば彼女の元へ走り出していた。フェンスにたどり着いた彼は、呆気に取られた彼女の腕を掴んだ。そして、今にも燃える世界に飛び込もうとする彼女に向けてこう言ったのだ。

「悪の対義語って何だと思う？」

善く生きてね、という声が蜜柑色の空から聞こえてきた気がした。